令和5年度

第46回 栃木県少年の主張発表 県大会記念文集

主催　栃木県青少年育成県民会議
　　栃木県・栃木県教育委員会
　　独立行政法人 国立青少年教育振興機構
共催　栃木県更生保護女性連盟

目　　次

県大会の様子 …… 2
開会挨拶 …… 栃木県副知事　北村　一郎 …… 4
次　　第 …… 5

発表文
最優秀賞
　女性が毎日笑顔でいられるように　宇都宮市立宝木中学校　３年　星野みおり …… 6
優秀賞（発表順）
　未来につなぐ　大田原市立金田南中学校　３年　戸村　美月 …… 7
　大切なもの　市貝町立市貝中学校　３年　河俣　美羽 …… 8
　祭りがつなぐ町　那須町立那須中央中学校　３年　板垣　結衣 …… 9
奨励賞（発表順）
　無限の可能性　鹿沼市立東中学校　３年　齊藤咲弥子 …… 10
　無関心をやめる　芳賀町立芳賀中学校　３年　舩生　　咲 …… 11
　どうして歴史を学ぶのか　佐野市立田沼東中学校　３年　横塚　彩芽 …… 12
　未来を守る　日光市立今市中学校　３年　鈴木　愛琉 …… 13
　命のリレーをつなぐために　那須烏山市立烏山中学校　３年　鶴田　一遙 …… 14
　違いをこえて　佐野市立北中学校　３年　若田部文香 …… 15
　言葉の奥にあるもの　さくら市立喜連川中学校　３年　山岡　紗蓮 …… 16
　記憶をつなぐ　宇都宮市立旭中学校　３年　宗像　文夏 …… 17
　繋ぐ　栃木市立栃木南中学校　３年　大門　蒼空 …… 18
　地元を愛する心　文星芸術大学附属中学校　２年　佐藤　凪紗 …… 19
　相手を想った思い込み　小山市立大谷中学校　３年　梅本　颯吾 …… 20
　ＩとＬＯＶＥとＹＯＵ　下野市立国分寺中学校　３年　篠原　花音 …… 21

講　　評 …… 審査委員長　髙橋　重年 …… 22
県大会の概要 …… 23
今年度の実施状況 …… 25
これまでの県大会 …… 26
県大会歴代最優秀賞 …… 27
〔参考〕第45回少年の主張全国大会　内閣総理大臣賞 …… 28

※栃木県更生保護女性連盟から県大会発表者全員に記念品として図書券が贈呈されました。また、栃木県と包括連携協定を締結している大塚製薬株式会社からは、発表者と宇都宮少年少女合唱団に商品の提供がありました。

県大会の様子

発表者受付の様子

開会式・副知事挨拶

観客席の様子

ミニコンサート（宇都宮少年少女合唱団）

審査委員長による結果発表・講評

最優秀賞　星野みおりさん
（宇都宮市立宝木中学校）

優秀賞　戸村美月さん
（大田原市立金田南中学校）

優秀賞　河俣美羽さん
（市貝町立市貝中学校）

優秀賞　板垣結衣さん
（那須町立那須中央中学校）

奨励賞授与

記念品授与

入賞者の皆さん

開　会　挨　拶

栃木県副知事
北　村　一　郎

第46回栃木県少年の主張発表県大会の開催に当たり、主催者を代表して一言御挨拶を申し上げます。

本大会は、豊かな感性を持った中学生が、様々なテーマについて深く考え、自分の言葉で表現することで、若者の誇りと自主性を育み、社会の一員としての意識を高めることを目的として開催しており、今年で46回目を迎える歴史ある大会です。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、令和２年度から来場者に制限を設け実施して参りましたが、今年度は４年ぶりに制限のない形で開催することができました。書面審査となっていた地区大会も、発表形式での審査となり、多くの中学生の皆さんに参加していただきました。

本日、この場にいる16名の皆さんは、各地区で選ばれた代表です。日頃の練習の成果を存分に発揮し、自信と誇りを持って、堂々と発表していただきたいと思います。

さて、県では、「心豊かでたくましいとちぎの青少年の育成」を目指し、家庭、学校、地域と一体となって、様々な施策に取り組んでおります。

御来場の皆様やこの大会の動画配信を御覧になっている皆様には、青少年の思いや考えをしっかりと受け止めていただくとともに、温かい声援を送っていただきたいと思います。

また、今年は現在の栃木県が誕生して150年となる節目の年です。改めて県民の皆様と、とちぎで生まれ、育ち、暮らす喜びや誇りを分かち合うとともに、未来に誇れる「新しいとちぎ」づくりに県民一丸となって取り組んで参りたいと考えておりますので、より一層の御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、お忙しい中、御出席いただきました御来賓の皆様をはじめ、共催者としてお力添えをいただいております「栃木県更生保護女性連盟」様、また本日審査をいただく皆様、そして、熱心に御指導いただいた先生方など、本大会の開催に当たり御尽力いただきました多くの関係者の方々に心から感謝を申し上げ、挨拶といたします。

第46回栃木県少年の主張発表県大会　次第

令和５年９月16日(土)　栃木県総合文化センター サブホール

１　開会式（13：00～13：10）

（１）主催者挨拶　　栃木県副知事　北 村 一 郎

（２）主催者・共催者・来賓・審査委員紹介

（３）「とちぎの子ども育成憲章」唱和

２　発表（13：15～15：00）（途中休憩10分）

３　宇都宮少年少女合唱団ミニコンサート（15：10～15：40）

審査委員会（15：10～16：00）

４　表彰式（16：05～16：30）

（１）審査結果発表・講評　　審査委員長　髙 橋 重 年

（２）表　彰

授与者	最優秀賞	栃木県生活文化スポーツ部長	野原 恵美子
	優秀賞	栃木県教育委員会教育次長	長　裕之
	奨励賞	栃木県青少年育成県民会議事務局長	野中正知
	記念品	栃木県更生保護女性連盟会長	伏木 ミサ子

最優秀賞

女性が毎日笑顔でいられるように

宇都宮市立宝木中学校　３年
星　野　みおり

みなさんは、「生理」「月経」と聞くと、どんなイメージをもちますか。「恥ずかしい」「話題にしにくい」といったことを思い浮かべる人も多いことでしょう。現代の日本では、生理の話を口にすることを、タブーとする意識が広く浸透していると思います。

しかし、それは少し違うような気がします。生理がくることは当たり前なことですし、恥ずかしいことではないからです。私は、生理になったばかりの頃、生理用品を上手に使いこなせず、困っていた時期がありましたが、生理をタブー視する風潮から、なかなか友人や先生に相談できませんでした。また、生理痛の重い私の友人は、腹痛や頭痛を感じながらも、男性の先生になかなか言い出せず、痛みを我慢しながら授業に参加していました。このように、生理で困っていることを「困っている」と言いにくい風潮に、私は疑問を感じています。

そんな時に、私は「生理の貧困」という言葉を知りました。「生理の貧困」とは、生理用品を買うお金がない、あるいは手に入れる方法がないなど、利用できる環境にないということを示す言葉です。発展途上国のみならず、格差が広がっている先進国でも、問題になっているそうです。世界中で問題になっているにも関わらず、「生理の貧困」に対する心ない意見をインターネット上で目にしました。「どうして数百円の生理用品さえも買えないのか」という、貧しさを批判する声でした。

なぜ、このような意見が上がってしまうのでしょうか。私は、生理に対する社会全体の理解不足が大きいと思います。生理は、女性が出産をするための大切な準備です。だからこそ、男性も女性も、次世代の社会のために、生理についての正しい知識をもち、理解すべきと思います。女性は、一人一人が自分の体について知るべきです。そして、男性には、生理の時の女性の体の変化について知ってほしいです。また、生理用品を買うことの大変さも理解してもらいたいです。たった数百円の生理用品も、年間にすると、大きな金額になります。また、急に生理になってしまった時に生理用品がないと、日常生活に支障が出ることもあるのです。

そんな時に、テレビのニュース番組で、学校にも生理用品を設置する動きが広がっていると知りました。しかし、私の学校には設置されていませんでした。先生に伺うと、「生理用品を無駄に使われてしまったり、いたずらをされてしまったりしたことがあったからだよ。」と仰っていました。確かにそれは良くないことです。しかし、ルールを明確にしてしっかり管理をすれば、また設置ができるのではないかと思いました。そこで、私は「校内の女子トイレに生理用品を設置する」という公約を掲げ、生徒会役員に立候補しました。急に生理になってしまって、困る人の助けになればと思ったからです。設置するだけではなく、定期的に補充をするなど、自分なりに責任をもって管理をしています。また、校内放送や生徒会朝会では、全校生徒に呼びかけを行いました。「生理をタブー視する風潮を変えたい」「生理を理解してほしい」という話をしました。初めは、生理の話題を出すことに抵抗がありましたが、誰かの役に立つと思えば、あまり気にならなくなりました。「生理用品があったから、慌てないで済んだ。助かった。」という声を聞くと、とても嬉しく思います。

こういった小さなことの積み重ねが、生理へのタブー視や不浄感を少しずつ払拭していくと私は思います。男女問わず、憚ることなく生理に関する話題ができ、誰もが生理の正しい知識を得られたら良いと思います。そして、「生理は当たり前」という意識と理解が広まる社会になることを願います。女性が毎日笑顔でいられるように。

優秀賞

未来につなぐ

大田原市立金田南中学校　３年
戸　村　美　月

広島の原爆ドームの前に立った瞬間、それまで楽しかった修学旅行の雰囲気は一変した。平和記念資料館では、当時の人々の遺品が多数展示されていた。それまで戦争の本をいくつも読んで、戦争を知っているつもりだった。しかし実物を目の前にして、言い表しようのない恐怖感に襲われた。知識としての戦争が、現実となって私の前に現れた瞬間だった。

そう思うと、急に学校の石碑が気になってきた。私が通っている金田南中学校の校門の横には石碑がある。帰ってきてから碑文を読んでみると、この場所にはかつて飛行場があり特攻隊の練習場にもなったと記されていた。優秀な飛行士を輩出し、多くの命が空に散っていったという。私たちが毎日生活しているこの場所の過去を知って驚愕した。

それまで、遠い知識としての戦争が現実となったとき、もっと多くのことを知りたくなり、母に聞いてみた。

学校付近は、戦時中、金丸飛行場があったため、空襲が多かった。その度に曾祖母は兄弟達を抱えて防空壕へと向かい、身を寄せ合っていたそうだ。暗闇の中、ただただ恐ろしかったと言っていた。あまり思い出したくないとも言っていたことを母が教えてくれた。そんな曾祖母も二年前の春に亡くなってしまった。もっと早くに聞いていれば、曾祖母の苦しみも理解できたかもしれないと悔しく思った。

母は、もっとたくさんのことを聞いていたようで、曾祖父の話も教えてくれた。

私の曾祖父は海軍に所属していた。入隊後、戦闘機の訓練を受け、空母に乗っていた。曾祖父が乗っていた空母は、二回敵の攻撃を受けたそうだ。幸いにも命は失わなかったものの、二回とも海に放り出され、死を覚悟したそうだ。生き残った仲間とともに、何日も何日も手をつなぎ立ち泳ぎをして、助けを待ったと話してくれたそうだ。

また、祖父方の曾祖父の話もしてくれた。曾祖父は体が弱かったため、なかなか赤紙が来なかったそうだ。赤紙が来たとき、曾祖父は喜びをかみしめながらこう思ったそうだ。「お国のためにやっと役に立つことができる」と。私は驚いた。「出兵するのは嫌じゃなかったんだ。喜んでいくものなんだ。」と。

だが、そんな曾祖父の思いとは裏腹に、戦場に立つと、すぐに後悔したそうだ。目の前で敵も味方も多くの人たちが、次々と倒れていく。自分も生き残るため、銃口を敵に向けるしかなかった。段々人としての感覚を失っていく感じがしたと悲しそうに言ったそうだ。

曾祖父がこの話をした後、ぽつりと「俺は人殺しだ。」と傷跡をさすりながら、悲しそうに呟いたとき、母は、このことは誰かに伝えなければならないと心に誓ったと語ってくれた。この言葉を聞いたとき、私も母同様の思いを抱いた。

あんなにいつも優しかった曾ばあちゃんや曾祖父たちが、そんな思いを抱えていたことを全く知らなかった。そんな辛い過去を背負っていたとは。

今私達にできることはあるのだろうか。今現在も地球の何処かで戦争が起こっている。誰もが戦争のない平和な世の中を望んでいるはずだ。だが、願ったり望んだりしているだけで世界の現状はなにか変わるのだろうか？今私達ができることは、戦争を現実として認識することだと思う。他人事ではなく自分のこととして、一人一人が考えて行かなければいけないことだ。

私は、積極的に国際関係や今の社会問題について学び、それを周りの人々に発信したい。そしてそれを聞いた人々が周りにそれをまた発信する、つながりを作りたい。難しいことだろう。だが、私はそれでもやりたい。「未来につなぐ」ために。

優秀賞

大切なもの

市貝町立市貝中学校　３年
河　俣　美　羽

「やだよ。つけたくない。わたしもみんなと一緒がいい。」

そう言う小学生のころの私。そんな私に、今日も父は「大切なものだから。」と言って手渡しました。

登下校のときに、周りの同級生は帽子をかぶっていました。ですが、私だけがみんなと違いました。友達に「なんで帽子じゃないの？」と聞かれたこともありましたし、「なんで私だけ？」と何度も思いました。父が、「大切なもの」と言ってこだわることよりも、私にとっては周りと同調することの方がよっぽど大切だと思ったのです。

あるとき、我慢できずに私は父に尋ねました。

「みんな帽子をかぶって登校しているよ。どうして私だけ？こんなの嫌だよ！」

そう言って駄々をこねる私に、父はこんな話をしてくれました。

わたしが住んでいる市貝町でのある夕方のこと。当時小学生だった父の同級生が、一人で下校していた時に、ある一台の車が突っ込んできました。おそらく運転操作を誤ったか、居眠り運転をしていたのでしょう。このような場面、皆さんはどうなると思いますか？小学生と車、ぶつかったら小さな子供はひとたまりもないでしょう。

「それで、どうなったの？」

たまらず私は父に尋ねました。きっとその子は大怪我を負い、もしかしたら命を落としてしまったかもしれないと思ったからです。

しかし、話の続きは予想を裏切られるものでした。その子は骨折したものの、命に別状はなく、後遺症などもありませんでした。理由は、その子が「大切なもの」を身につけていたからです。

「大切なもの」。それは、わたしも毎日つけているヘルメットです。事故に遭った父の同級生は、ヘルメットをつけていたから、骨折で済んだのです。その子の命を救った代償に、ヘルメットは真っ二つに割れたそうです。わたしが毎日、嫌で嫌で仕方がなかったヘルメットが、本当は私の命を守るための「大切なもの」だったのです。

父は続けてこう話してくれました。実はこの事故の前にも、小学生の列に車が突っ込む事故があったこと。そしてそのときの小学生はヘルメットをつけていなかったから、車にぶつかった拍子に頭を地面にぶつけて、事故から四十年経った今でも後遺症が残っていること。その人は父の知り合いで、父は今でも当時のことが忘れられないのだそうです。この事故が教訓となり、市貝町では小学生のヘルメット着用を義務化しました。そのため、二回目の事故は軽症で済んだ、そう父は話していました。

近年、日本では自転車に乗る際のヘルメットの着用が呼びかけられています。とは言っても、努力義務であるため、校則でヘルメットの着用が定められている中学生以外で、ヘルメットをしている人はあまり見かけません。着用率はまだまだ低いのが現状です。私の友人にも「ヘルメットをかぶると暑い、蒸れる」、「髪型が崩れて嫌だ」と言う人がいて、私も共感できる部分はあります。でも、命を守ることは、見た目や不快感などには変えられないくらい「大切なもの」なのではないでしょうか。

私の父の話は、自転車ではなく徒歩で通学する小学生の話でしたが、当時の事故を繰り返さないように、私の兄も、兄の友達も皆、小学生の頃からヘルメットをつけて通学しました。しかし、わたしが小学校に入学する頃には、その習慣が失われてしまいました。それでも父は、私に毎日「ヘルメットをつけなさい。大切なものだから。」と言い続けてきたのです。

当時はヘルメットにこだわる父の気持ちが分かりませんでしたが、実際にあった事故の話を聞いてからは、周りと違うことに不満を感じながらもヘルメットをかぶり続けました。今になって考えると、私の安全のために、私の命を守るために毎日呼びかけてくれた父に感謝しています。

ヘルメットの着用義務には罰則がなく、私と同じ中学生でも「先生にばれなければ大丈夫」と言ってはずしてしまう人がいる事も事実です。しかし、一時の安易な考えで大切な命を落としてほしくはないのです。命を守るために、ヘルメットがいかに重要なものであるかを皆さんに知ってほしいのです。

今日も私は「大切なもの」を身につけて自転車に乗ります。

優秀賞

祭りがつなぐ町

那須町立那須中央中学校　３年
板　垣　結　衣

威勢のいいお囃子、太鼓の響き。浴衣を着て友人と連れだって歩く楽しさ。軽やかな下駄の音。屋台のおいしそうな匂い。祭りには、笑顔とさざめきがあふれていました。

私の故郷、那須町では八月に「なすっこ祭り」が開催されます。観光客を呼ぶような派手さはありませんが、家族や町の人と一緒に楽しむ素朴な祭りが私は大好きです。昨年は友人と、盆踊りに参加しました。来場する人は多くても、祭りのメインである「盆踊り」に参加したのは四団体だけ。コロナ以前に比べると大幅な減少です。小さい踊りの輪を寂しく感じました。

三年生に進級し、私は生徒会長になりました。生徒会のスローガンは「つながる・見つける・志す」。中学校と地域との交流を広げ、那須中央中学校から地域を盛り上げていきたいと考えていました。

六月、生徒会は、祭りの実行委員を務める三人の方にインタビューを行いました。本業の仕事のかたわら、ボランティアで祭りを支える三人は、祭りと町への思いを熱く語ってくれました。資金集め、人手不足、参加者の減少など、祭りの裏側は厳しいようです。日本各地の祭りは、一様に少子高齢化による担い手不足で危機に直面していると聞きますが、我が故郷も同じだったのです。しかし、同時に、私たちにできることも見えてきました。

七月に入り、生徒会は、祭りのボランティアを募集しました。応募した生徒は延べ九十人。予想以上の人数です。地域の祭りが好きで、祭りの危機を救いたいという思いの現れでした。私たちの役割は、会場準備をすること、資材の運搬やテント設営。当日はアナウンスや会場の案内。翌日は会場の片づけ。十数人の実行委員だけでは難しくても、中学生が九十人もいれば心強いはずです。

「祭りのために何ができるか」をクラスでも話し合いました。手作りの品物の販売や子どもが遊ぶコーナーを提供すること。ＳＮＳを活用したＰＲ。ステージをダンスや音楽の発表にも活用すること。多様なアイデアが出ました。祭りのために知恵を出し合うのは、わくわくするような経験でした。

アイデアの中から、那須中央中学校のオリジナルタオルを販売することになりました。また、生徒会の呼びかけで、盆踊りに団体参加するチームも増えました。中学生だけで七団体。私も参加しました。盆踊りの輪が大きく広がったのです。

この瞬間も、祭りに向けて働く人がいる。町の人を笑顔にする祭りのために、人知れず動いてくれる人がいる。大きな発見でした。脈々と地域の人々が受け継いできた祭りは、私たちの世代がその重みに気付かなければ途絶えてしまう。私たちの手で祭りを未来に残したいと強く思いました。

祭りの継承の問題は、環境問題に似ています。課題に気が付いても、傍観する人が多ければ手遅れになります。途絶えた祭りも、壊れた環境も元に戻すことは困難です。「他人事にしない」が私の信念です。実行委員の方からも「故郷のことだから、どんなに大変でも他人事にせず傍観しない。投げ出さない。」という気概を感じました。今ならまだ間に合う。私たちが傍観せずに行動すれば。今年の祭りがいつもより特別に思えるのは、私たちが祭りを「見る側」から、「作る側」になったからです。

祭りを続ける意味は何だろう。祭りを通して、私は素敵な人々に出会いました。祭りを通して町を思い、祭りを通して作られた人のつながりが、地域の文化や未来を守っていく。祭りの意味はそこにあります。日本各地には三十万もの祭りが存在します。地域の心を一つにして助け合って生きるためには、祭りがどうしても必要だったからなのでしょう。

祭りは見るよりも参加するほうが百倍楽しい。だから、どうか、あなたも故郷の祭りに関わってほしい。祭りを支える人々の思いと、祭りに集う人々の笑顔に触れてみてほしい。故郷の祭りが町をつなぐのだから。

奨励賞

無限の可能性

鹿沼市立東中学校　３年
齊　藤　咲弥子

次はどの一手をさすべきなのだろう。本当にその手でいいのだろうか。この手を指すと、相手は何を指してくるのだろう……。私が九歳の頃からとりこになっている将棋。対局中、将棋盤を前に、私はいつも、不安や恐怖を感じながら一手一手を考えている。

将棋とは、戦陣になぞらえた八十一個の区画を設けた盤に駒を並べ、互いに一手ずつ駒を動かして行う競技である。その一手には、様々な選択肢があり、指し手の組み合わせは、十の二百二十乗通りあると言われている。その無数の選択肢の中から、たった一つの最善な一手を、自分の力で選び抜いて、次の指し手を決めていく。先の先まで、あらゆることを想定して決めなければならないので、悩むことも、長考することも、当然にある。そうやって選び抜いていった一つ一つの指し手が、最終的な結果、勝ちか負けにつながっていく。一つの小さな選択の積み重ねが、その後の結果に大きく影響する。精神的に大変負荷のかかる競技である。

その一方で、将棋には楽しさもある。将棋は一人一人指す手が異なるため、最終局面が他の対局のものと全く同じになる可能性が、ほぼ０％なのだ。つまり、最終局面の形は無限に存在していると言っても過言ではない。不思議だとは思わないか。ただの四角い木の盤に、二十本の線を引いて、たった八種類の駒を並べた、というだけの単純そうな仕組みなのに、そこには無限の可能性が満ちている。きっとまだ、誰も考えたことのないような指し手が眠っているに違いない。それはまるで、まだ誰も知らない宝が眠っているようで、私はわくわくする。このことを表すならば、目の前に一本の道があり、一歩踏み出す度に分かれ道が現れるというイメージだ。一人一人選択する道が異なるため、最後に辿り着く場所も違ってくる。

そして、その道は、私たちが生きていく中にも、存在しているのではないだろうか。この地球上には七十億以上の人間が存在する。その一人一人が起こす行動やもつ考えは数え切れないほどある。そして、それらをどう選択していくのか、つまり、私が、私たちが、どう行動していくのか、どんな発想を抱いていくのか、は、自らが決めることであり、その人の中にしか答えはない。これは、人の行動や考えの選択肢が無限にあることを示している。そしてそれら一つ一つの行動や考えは、これから起こるであろう色々な出来事へとつながる。最終的には、社会へ影響を与えることだって、可能なのかもしれない。

これまで私は、対局の中で、いくつものピンチに遭遇し、逆境に立たされてきた。それでも、将棋盤と向き合い、先の先までじっくりと考え、今の自分ができる最善な選択をして乗り越えてきた。その全てが正しかったとは言えない。しかし、次に私はどうするのか。これから私は、どう進んでいくべきなのか。それらは全て、私自身の中からしか生まれない。ならば、自分の判断が間違っているかもしれないと、おびえるのではなく、先を読み、自分の駒を自信をもって進められるよう、私は私の人生を歩んでいきたい。そう生きるためにも、今、目の前に広がる選択肢という名の無数の分かれ道の中から、最善なものを、自らの力で選び抜けるようになりたい。そのために、まずは自分自身を向上させる必要がある。たくさんのことを見聞し、周囲の人との関わりを大切にしながらいろいろな人の考えを取り入れることで、自分自身の知識を増やしていきたい。また、どんな物事に対しても、自分の意見を持ち続けたい。そして、無数の選択肢をもつ将棋と同じように、自分の人生も、簡単に投了することなく、最後の一手まで、一歩一歩自分自身で切り拓いていける人間になりたい。この、有限な世界で、私自身の、無限の可能性を信じて。

奨励賞

無関心をやめる

芳賀町立芳賀中学校　３年
船　生　　咲

「愛」の反対語は何か知っていますか。愛の反対は「憎しみ」ではありません。「愛」の反対は「無関心」なのです。これは、マザー・テレサの言葉です。

今年の二月二十四日でロシアが隣国ウクライナに侵攻して一年が過ぎました。未だに両国の和解のめどは立っていません。侵攻が始まった当初は、日本でも驚きをもって伝えられ、連日大きなニュースとしてテレビや新聞で報道されました。しかし、一年以上が経過し、戦闘が膠着している今、テレビや新聞での扱いが目に見えて小さくなってきました。ウクライナでは、毎日大勢の兵士や一般人が亡くなっているというのに。

「メディアは、視聴者が興味を持っているだろう事件については大きく取り上げるが、そうでないものは、取り上げなかったり、小さな扱いしかしない」と授業で習いました。つまり、メディアのウクライナ戦争の扱いが小さくなったのは、我々視聴者がこの戦争に対して興味を失いつつあると言うことなのでしょう。確かに日本から遠いところでの出来事なので、日本人にとってあまり関係の無いこととして捉える人は多いかもしれません。しかし、この戦争は、私たちの生活のいろいろなことに影響を与えています。特に昨今の物価高はこの戦争が原因だといわれています。日本人にとっても関係の無い話では決してないのです。クラスでこの問題について話し合いをしたことがあります。その時あるクラスメイトが「だからといって、私たち中学生にはどうすることも出来ないじゃないか。」と発言し、その意見に同調する人が何人もいました。本当にそうでしょうか。本当に私たちにできることはないのでしょうか。私はそうは思いません。募金や支援物資を送るなどといった支援の方法もありますが、私たちが一番やるべきこと・私たちでもやれることは、「この戦争に対する関心を失わない」ということだと思います。

私は中学一年生のときに、友人とのちょっとしたいさかいがきっかけで、一時心を病んでいたことがありました。周りの人と関わるのが怖くなってしまい、何かあるとすぐに自分のせいだと思い込み、自分を否定し続け、気付くと友人にも家族にも本音を話せずにいる自分がいました。部活動にも消極的になり、進路の話をされても、数年後のことなんてどうでもいいと思っていました。

そんな自分が嫌で、二年生になってのクラス替えを機に、自分改革を断行したのです。何にでも自分から積極的に飛び込んでいこうと決心しました。まず授業中の話合い活動で積極的に発言することから始めました。そして、学級委員にも立候補しました。また、地域のお祭りなどの行事にも参加するようにしました。最初は、ぎこちなかった世代の違う方との会話も次第に気さくに話せるようになりました。そうしたたくさんのコミュニケーションは、私の自己肯定感に大きな変化をもたらし、それに伴い、自分のことを少しずつ好きになっている自分に気がつきました。そのことは所属している柔道部の活動でもいい影響を与えました。積極的に声を出し、つらい練習にも耐え、部員たちとその日の課題を教え合うことで心も技術も向上しました。その結果、最後の大会では、団体戦と個人戦で優勝することが出来ました。一年前には思いもよらなかったことです。進路においても、行きたい高校が見つかりました。私は今、新たな目標に向かって進んでいます。

先日、ニュースで世界平和度指数が発表され、日本は世界の「第九位」でした。その反面、国民の幸福度ランキングでは、「四十七位」だそうです。安全で平和な国に暮らしていても、幸せを感じていない国民が多いと言うことです。その一つの要因として、人間関係の希薄さが挙げられると思います。

私たちは、もっともっと自分に他人に関心をもっていいのではないでしょうか。関心をもって接することで、私のように大きく変わることがあるのです。世界中の人たちが、他人に、他国に少しでも関心を持つことで、最初は小さな変化でも、それがいつか大きくなって、世界の平和に影響を与えるようになることを、私は願ってやみません。

奨励賞

どうして歴史を学ぶのか

佐野市立田沼東中学校　３年
横　塚　彩　芽

今年のゴールデンウィーク。歴史の調べ物をしていた私は、家に遊びに来た叔父から、「彩芽はどうして歴史の勉強をしているの？」と聞かれました。

「え？どうしてって…楽しいからかな。」

私は歴史が好きです。学校の授業が、毎日歴史だけでもいいくらい好きです。

私の歴史好きに拍車をかけたのは、ある歴史ゲームや歴史物語の舞台との出会いです。それらを通して、今私が勉強している歴史も「ちょっと何かが違っていたら、こうではなかったかも」と思え、今と異なる歴史の可能性や、歴史と自分のつながりを強く感じるようになったのです。

「僕が中学生のときは、必死で暗記することが歴史の勉強だったよ。」と叔父は言いました。過去に起こったこととして暗記するだけなんて、なんてもったいない。それに、そこにどんな意味があるのでしょうか。

歴史に登場する人たちは、皆魅力的です。とにかく皆、ちゃんと「人」なのです。例えば、源頼朝は弟の義経や範頼を討伐する命を出しますが、頼朝にも棟梁として、また兄としての苦しみや葛藤があったこと、板垣退助が幼なじみの後藤象二郎を、彼が苦手なヘビでからかったこと。皆私と同じように、喜怒哀楽もあって、家族や友達もいる。教科書に印刷された文字としてでなく、彼らの生い立ちや考え方なども知り、多面的にその人を見ることで、歴史の捉え方も広がります。

しばらく話した後、叔父は「歴史って何のために学ぶんだと思う？」と言いました。

私は楽しいから学んでいるけれど、楽しくない人も学んでいるし…？　私は、答えられず、叔父との会話はそこで終わりました。

最近、先の大戦について授業で勉強し、広島と長崎では、原爆によって約二十二万人が亡くなったと知りました。「やくにじゅうにまんにん」と聞いてもピンときませんでしたが、被爆者の女性の体験をテレビで見て、原爆の現実が自分の中で咀嚼されました。倒れている人々を踏み越えながら避難したときの足の裏の感触、がれきの下に残してきてしまった友人の顔、それらは、八十年近くたった今もずっと「ここにある」と言っていました。「二十二万人」というひとくくりの数字、さらに「約」などという乱暴な表現は、この上なく失礼だと気付きました。歴史には、懸命に生きた一人一人の人生や命、そして次の世代への願いが込められているのではないかと思います。頼朝でも板垣退助でも被爆した女性でも同じように。

授業の終わりに、「二度と戦争をやらないために、この勉強をしているんだよ。」と社会の先生が言いました。何のために歴史を学ぶのか。「歴史を学ぶ」というより「歴史から学ぶ」ということなんだ、と腑に落ちました。そして、その勉強はいつも未来志向だということもよく分かりました。

さて、私たちは歴史から上手に学べているでしょうか。人類は戦争の惨禍を知っているはずなのに、現代も武力の衝突は絶えません。立場や時代、個人によっても、多様な「正しい」がある中で、どう学びを生かすかは、実際難しい問題です。それは正しい選択なのか、皆のためになり未来のためになるのか。私たちは、過去の歴史からの問いかけに真剣に応えなければなりません。今、歴史をつなぐ一区間に存在する者の一人として、私にもその責任があります。

「歴史を学ぶ」というのは、生き方を学ぶこと。「どうして学ぶのか」は、私たちがどう生きるべきかという知恵や希望を未来につなぐため。これが今の私の答えです。

今度、叔父に私の考えを伝えたいと思います。叔父は、何と答えてくれるでしょうか。

奨励賞

未来を守る

日光市立今市中学校　３年
鈴　木　愛　琉

「日光」といえばどんなイメージがありますか。私は、「自然が豊か」というイメージを持っていました。しかし、その考えが大きく変わる出来事がありました。

中学二年生の時に、奥日光で行われるボランティアに言われるがまま参加しました。自然の中を歩くことは好きだったので、楽しみでもありました。

活動場所に着くと、そこにはきれいな黄色い花がたくさん咲いていました。「やはり、日光は自然が豊かでいいな。」と思っていると、ボランティアの方々はその花を次々に抜いていきました。「え、この花をむしるの？」と驚いている私に、ボランティアの方々は鎌を渡し、「これを根っこから抜いてね。」とやり方を教えてくれました。

「きれいだな」と思った花を抜くと言われ、正直戸惑いもあったし、抵抗もありました。「きれいな花なのだから、残しておけばいいのに。もったいない。」と疑問を抱きながら駆除しているうちに、その場所はきれいになりました。

袋には、はみ出すほどの花があり、重さをはかると百キロもありました。こんなに花を抜いてしまって日光の自然は大丈夫なのだろうかと疑問に思っていると、ボランティアの方が「これで日光の自然を守ることができる。」と言っていました。この体験から私は、本当の自然の豊かさとはなんなのだろうと考えるようになりました。そして、その答えを探すために、今年もボランティアに参加しました。

去年駆除したから今年は生えていないだろうと思っていたものの、その植物は広範囲に繁殖していました。夢中になって作業に取り組み、駆除を終えました。きれいになった場所を見渡すとポツン、ポツンと紫の小さな花をつけた低い木々が、寂しげにありました。「これは駆除しないのかな。」と思い、調べてみると「ホザキシモツケ」という植物でした。この植物は、この奥日光と長野県霧ケ峰にしか生息していない植物だったのです。では、私が駆除していたものは何かというと、特定外来生物の「オオハンゴンソウ」でした。

私は、この事実を知り、自分の手で日光の自然を守れたことを嬉しく思いました。そして、私たちの知らないところで、日光の自然を守るために活動してくれている人々がいるから、今も日光の自然は守られているのだろうと気づきました。

それと同時に、私は、ただ草木が生い茂っている状態を「自然豊か」と認識していたこと、目の前にある自然を、外来種や在来種関係なくひとくくりで見ていたこと、奥日光が「ラムサール条約湿地登録」をされていることに誇りを持っていましたが、字面でしか理解していなかったことに悔しさも覚えました。

本当の自然の豊かさとは、昔からその地域にいた生物が、何者にも邪魔されずに伸び伸びといつまでも生息し続けることだと、強く思うようになりました。

現在の日本に目を向けてみると、外来種による被害が問題になっています。外来種が在来種に影響を及ぼし、その数を減らしたり、絶滅に追いやったりしていることや、雑種を作り、在来生物の遺伝的な独自性に影響を及ぼしていることが問題視されています。この状況が続いていけば、いずれ日本に古くから住む生物たちはいなくなってしまいます。その生物がいなくなってしまった時、果たしてそれは「日本の自然」と胸を張って言えるでしょうか。日光も同様に、日光から在来種が消えてしまった時、本当に「日光の自然は豊か」と言えるでしょうか。

私たちの住む日本は、美しい自然で溢れています。しかし実際には、外来種によって在来種の存在が脅かされているのも事実です。今目の前にある自然に目を向けてほしい。日本の自然の美しさを守るために力を貸してほしい。私はこれからもボランティアに参加し今ある自然を守り続けていきます。

日本の未来を守るのは私たちです。

奨励賞

命のリレーをつなぐために

那須烏山市立烏山中学校　３年
鶴　田　一　遙

従兄弟が救急車で運ばれ、急性白血病と診断された。

深刻な顔をした母にこのことを聞かされたとき、うまく声が出ず、「うん」とうなずくのがやっとでした。

大学生の従兄弟が急性白血病と診断されたのは二年前の十月。最近やっと退院できたようなので、父と一緒に従兄弟に会いに行きました。従兄弟は、私たちに自身の体験を話してくれました。

従兄弟は治療に骨髄移植を選びました。白血病にはＨＬＡという型があり、そのＨＬＡ型が一致すると移植ができます。ドナーの方が見つかって、手術が行われました。患者とドナーどちらにも大きな負担のかかる移植手術。しかし、提供を決意してくれたドナーの方のおかげで従兄弟は助かりました。

「一遙は十八歳になったら、ドナー登録をする？」

帰り道、父に何気なく聞かれ、私は初めて自分がドナー登録をすることについて考えました。骨髄バンクのドナー登録の条件の一つに「十八歳以上、五十四歳以下」というものがあります。三年後、私はドナー登録をするだろうか。

その時、私は「怖い」と思いました。自分が誰かのために手術をするというイメージがわかなかったからです。

それから、私は骨髄バンクのドナー登録について調べ始めました。私の「怖い」という思いは、無知から来るものだと思ったからです。

登録が、献血の際にたった二ミリリットル程度の採血でできること。骨髄中の造血幹細胞の採取の仕方。骨髄バンクに登録したドナーの死亡例は、今までにないこと。

そして、現在も二千人もの患者さんがドナーとの適合を待っていること。

兄弟間であっても、ＨＬＡ型の一致率は四分の一程度だと知りました。今回従兄弟は二人適合する人が見つかりましたが、「運がいい」と言っていました。いまだドナーの方が見つからず、待ち続けている人や、見つからないまま亡くなってしまった方もいます。

また、ドナー登録者数を増やすために活動している人たちがたくさんいることも知りました。献血やドナー登録の推進のために、各地を巡って活動しているボランティアの皆さん。自身の病気の経験を通して、ドナー登録の大切さについて発信している患者さん。私の従兄弟も、その一人です。ドナーとなってくださった方への感謝の気持ちと、一人でも多くの人に病気について知ってもらいたいという思いを、ＳＮＳで発信し続けています。

たくさんの人の思いや、活動を知るうちに、私も一人でも多くの患者さんを救いたいと思うようになりました。

現在の登録者は四十代以上が多く、十年以内に二十二万人もの登録者が減ってしまいます。そのため今、若者のドナー登録が求められています。

登録者数を増やすと同時に、ドナー登録や移植手術への理解が広がることが大切です。骨髄移植のために休暇を取れる「ドナー休暇」制度がある企業も増えてきています。職場の人にかかる負担や、周りの目を気にせず、移植手術に踏み切れる雰囲気が社会に広まれば、助け合い支え合い、一人ひとりの命を大切にできる社会の形を実現できると思います。

今、父に同じ質問をされたら、私はこう答えます。

「十八歳になったら、ドナー登録をしたい。」

骨髄バンクの登録は、命のボランティアとも言われています。病気には、誰もがなる可能性があり、一人ひとりが大切な命を燃やして生きています。同じ社会に生きる仲間として、命のリレーをつなぐことができる。そんな骨髄バンクに、あなたも登録してみませんか？

奨励賞

違いをこえて

佐野市立北中学校　３年
若田部　文　香

突然ですが、私はあなたにはなれません。逆に、あなたも私にはなれません。当たり前のことですが、私たちは皆違うからです。私たちはその違いを乗り越えるために、相手のことを理解しようと、努力し続けなくてはならないのではないでしょうか。私は最近、外国人であることを理由に日本で侮辱された経験がある人が、実に、約三割もいるということを知りました。外国人であるというだけで入居を断られたり、就職を断られたりする例があるそうです。このような、生活するのに困る差別がこの日本で多く存在しているそうです。私はこのような差別が日本中で起こっているのだと思うととても心が痛みました。

私は、中国と日本の両方にルーツがあります。私はこのことをクラスメイトに伝えたことがあります。すると、ある友人が「だから気が強いんだね。」と言ってきました。その友人には悪気がないことは分かっていましたが、私はなぜ、その友人が親のルーツだけでその人の人格を決めつけているのかがよく分からず、悲しい気持ちになりました。ルーツとその人の性格に何の関係があるのでしょうか。私は私です。「外国にもルーツがある私」でなく、私自身がどんな性格で、どんなことを考えているのかを知ってほしいと思いました。世界にはいろいろな人がいます。その一人ひとりが、違った価値観や考え方をもっています。私たち全員が、考え方や感じ方、行動が違うのは当たり前のことです。しかし、私たちはときどき、お互いの「違い」を、当たり前のこととして受け入れることができないことがあるのです。

私の父は中国人です。私の父と母は、価値観や考え方などの違いで喧嘩をすることがよくあります。味付けの好みや、時間の使い方、お金の遣い方など、他にもいろいろな場面で言い合いをします。しかし、母は決して、国籍の違いや文化の違いのせいにはしません。「皆違うところがあるんだよ。大切なのは、違いを受け入れられないことを、何かのせいにするのではなく、相手の良いところを探し続けることだよ。」と母は言っていました。私はこの時までずっと、誰かとうまくいかないことを、何かのせいにして生きてきました。しかし、違いから目をそらさず、相手と認め合いながら生きていくことが大切なのだと気付くことができました。

世界にはいろいろな考え方をもつ人々がいます。違う意見をもっていると、どうしても意見の食い違いが起こってしまいます。それは、私の家でも言えることです。私の家では、テレビで何を見るか、夕食は何が良いかなど、ささいなことでも意見が食い違い、言い合いになることが日常茶飯事です。しかし、そんなときは、相手の主張をよく聞きます。そうすることで、考えもしなかった意見や気持ちを知ることができます。お互いを受け入れ、家族皆が幸せに過ごせるように、私の家では話し合いを第一にしているのです。

私たちは、価値観も考え方も文化も宗教も生まれたところも何もかもが違います。しかし、私の家族は違いを認め合って、幸せに過ごしています。私たち家族のように、お互いの違いを認め合い、理解し、受け入れることができたなら、心から相手と接することができるはずです。今、世界では国の領土や宗教、民族の違いから、戦争が絶えません。何百年にも渡る長い歴史上、なかなかすぐには解決できない問題でもあることは分かっています。しかし、戦争は同じ人類の傷付け合いです。傷付け合いでは何も解決しません。戦争を話し合いでやめさせるために、積極的に間に入って仲を取りもつ国が必要です。私は唯一の被爆国である日本がその役割を引き受けるべきだと考えます。国同士が違いをこえて理解し合えたとき、平和な世の中をつくることができるのではないでしょうか。

奨励賞

言葉の奥にあるもの

さくら市立喜連川中学校　３年
山　岡　紗　蓮

「なんでもない。」
私は視線を外し、低い声で答えます。母に、
「どうしたの？最近。」
と聞かれたからです。

本当は相談したいことがありました。学校で友達と気まずくなって、どうしたらいいか悩んでいました。私が妹に強く当たっているのを見て、母が心配したのです。
「言ってもどうせ分からないでしょ。」
口には出さずに、心の中でつぶやきました。

私の母は、フィリピンから日本に来ました。日本に来てから日本語を学び、家では私たちとは全て日本語で話しています。でも、単語を連ねる会話では限界があり、難しい内容は理解できません。幼い頃から、いつも元気で前向きで、娘たちを応援してくれる母が大好きでした。他のお母さんと少し違うフィリピン人の母を自慢に思っていました。しかし、最近は私の使う言葉が難しくなったのか、言いたいことが正確に伝わらないことがあり、見当外れな返事の母にいらだちを覚えるようになりました。もっと聞いてほしいことがあるのに。こんな場合母だったらどうするのか、女性ならではの相談事、母を尊敬しているからこそ母の意見が聞きたいけれど、難しいなと感じていました。

私はソフトテニス部に所属していました。入部したての頃は、なかなかなじめずにいました。しかし、先輩方が気軽に雑談をしてくれたり、笑顔を向けてくれたりするうちに、気兼ねなく相談できる大切な存在になりました。だから、三年生の先輩方が引退する送る会で、私は胸が一杯でした。今までの感謝、お別れの寂しさ、宝物となった思い出、言いたいことがたくさんありました。そして、その思いを伝える私の番がやってきたのです。
「・・・。」沈黙が続きます。
「まずは先輩方、ありがとうございました。」この後は支離滅裂。出るのは涙ばかり。言いたいことの十分の一も言えませんでした。

でも、この情けないスピーチを先輩方がしっかりと受け止めてくれていたと分かりました。聞いていた先輩方がやっぱり泣きながら、
「わかったよ。ありがとう。」
と、言ってくれたからです。言葉にならない自分の思いが伝わっていたのです。

私は、コミュニケーションについて考えました。今までの私は、表面上の言葉、どのように伝えるかばかり気にしていました。しかし、この経験から、人と人とのコミュニケーションには、言葉の元になる「思い」のやりとりがあるのではないかと思えたのです。

詩人である大岡信さんの評論に、「言葉は氷山の一角」という言葉がありました。「海面の水面下に沈んだ部分にその言葉を発した人の心がある」と。「私たちの言葉は、そういう深い部分をのぞかせる窓のようなものであって、私たちはそれをのぞきこみながら相手の奥まで理解しようとしている」と。

情報のデジタル化が急速に進み、私もコミュニケーションツールを使うことが多くなりました。リモートやスマートフォンでの速くて正確な言葉のやりとり。私はそれに慣れてしまって、大切なお互いの思いの部分を忘れていたのかもしれません。それらはコミュニケーションではなく、情報伝達に過ぎないでしょう。人と人とのコミュニケーションには使われる言葉の奥に自分や相手への思いの部分があり、私たちはお互いにそれを感じ取って、やりとりをしているからです。

母が心配して私に話しかけてくれたのは、私のもやもやを感じ取ってくれたからです。言葉に出さなくても母にはお見通しで、私の情報ではなく、思いを聞き取ろうとしてくれていたのです。だから、私も思いを伝えていこうと思います。
「あのね、聞いて、お母さん！」

奨励賞

記憶をつなぐ

宇都宮市立旭中学校　３年
宗　像　文　夏

宇都宮市のシンボルとして市民に親しまれる「大イチョウの木」。私たちが通う旭中にも、その大イチョウの木が長い歴史を、私たちに伝えている。七十八年前の七月十二日。Ｂ２９爆撃機が宇都宮の空を真っ黒に覆いつくした。多くの命が奪われた宇都宮大空襲は、街中が爆弾による戦火により、全てのものが焼き尽くされた。「大イチョウの木」は、その地獄のような戦火の中で、再び、葉を芽吹かせた希望の象徴として、今なお、宇都宮の街を見守っている。

私にとって、戦争とは、歴史上のどこかつくられたものだった。実際には、今この瞬間にも、様々な場所で紛争や内戦が起こっているはずだ。しかし、どこか遠い地のことであったり、今の自分の生活に影響がなかったりすると、現実感のない空虚な話のように感じてしまう。日本が戦後築いてきた、平和で安定した社会。誰もが、ずっとこの平和が続いていくのだと疑うこともなく、「当たり前な日々」を過信している。願わなくても、温かいご飯を食べ、毎日学校に通い、家族や友だちと笑いあうことができる。

しかし、昨今の日本の周辺を取り巻く環境を見てみると、とてもそうとは思えない。他国からミサイルが飛んできたり、軍艦が領海内に侵入してきたり、ニュースからは、次々と危機感を覚えるような出来事が、立て続けに報道されている。

「永久に忘れることを勧めたい」－－。昨年の三月、ロシア外務省報道官の、この発言が世間を騒がせた。北方領土の主権を持っているのは、日本ではなくロシアであるとの見解が、そこには見え隠れしていた。この会見を聞いた多くの人々が憤慨し、挙句の果てには、「戦争賛成論」にまで言及する発言も飛びかった。こんなにも簡単に、「戦争」という考えに発展してしまうことに、私は疑問を呈さざるを得なかった。「戦争」は繰り返してはいけない。「戦争」からは何も生み出さない－－。誰もが理解している平和への祈りの言葉。しかし、テンプレート化された言葉を繰り返すだけで、果たしてそこに、意味はあるのだろうか。

私が小学生の頃、広島の原爆ドームを訪れたことがあった。そこには写真やテレビで見たものとは全く違う世界が広がっていた。実際に間近に見えたものは、言いようもない、残酷で悲惨な闇、そのものだった。鉄骨がむき出しになった屋根、周辺に散らばる瓦礫、崩れかかった壁面。そして、人影が焼き付いたコンクリート。しばらくは何も言葉が出てこなかった。それほど、大きな衝撃で、胸がいっぱいだった。これが戦争なのだ。一秒前までは、人々はそれぞれの日常を生きていた。それなのに、たった一瞬のうちに、全てを奪われ失ってしまったのだ。そこで見た残像が、繰り返し、戦争の愚かさを投げかけてくるようだった。

今、日本は大きなうねりの中にある。防衛費の増額が始まり、国会では、将来的に反撃能力をもつような憲法改正を目指している。私には、まだ選挙権もなく、正式に自分の意思を投影できる場はない。しかし、私たちの世代にもできることは必ずある。過去の戦争における悲劇を忘れず、その過ちを胸に刻むこと。今目の前で起こっている戦争に慣れてしまわず、私たちができることは何かを考え続けること。変わりゆく時代の流れに目を向けて、正しいかどうか真剣に議論すること。そして、最も大切なことは、過去の人々の記憶を風化させず、そのまま未来に「つなぐ」ことだ。

六月。旭中は、大きな蓮の花が見ごろを迎える。宇都宮城跡の蓮池再生を目指し、発掘調査で出土した種から発芽した蓮の花だ。八月。花壇には、ひまわりが大きな花を咲かせる。東日本大震災の際、瓦礫の中から芽を出し、人々に希望を与えた、ど根性ひまわりの種から育てられたものである。そして十月。宇都宮空襲後、宇都宮の人々の心の支えとなった「大イチョウの木」が、校庭で色づき始める。どれもが、時間を、歴史を、たくさんの人々の思いをつないでいる。見えない過去の記憶をつなぐのは、次は、私たちの番だ。たった一人が思っているだけでは、何も始まらない。多くの人々が、同じ想いをつなぐことが必要だ。そうなる未来を切に願って……。

奨励賞

繋ぐ

栃木市立栃木南中学校　３年
大　門　蒼　空

「蒼空ちゃん、インスタ教えて。」
「ライン交換しよう。」
最近そう言われることが多くなりました。

私はスマホをもっていません。タブレットもパソコンもゲーム機も……。
「何も持っていなくてかわいそう。」
中一の時そう言われたけれど、私は自分をかわいそうだと思ったことはただの一度もありません。私には必要ないからです。

スマホは友達を作るのに使えるらしく、私の所属していたバレー部でも、インスタで知り合った対戦相手の人と友達になっているのを何度も見ました。私にとっては信じられない光景でした。お互いに初めて会ったはずなのに……。インスタはその人の一部なのかもしれないけれど、会って話してみないと分からない一面だってあるはずです。会って、話して、段々距離が縮まっていく方が自然です。実際に相手と会って、その人を本当の意味で知ろうとするからこそ、信頼できる本当の友達同士になれると思います。スマホは便利だけれど、それに頼りすぎれば、友達との仲は広く浅いものになってしまいます。友達になりたいという気持ちと、相手に話しかける勇気さえあれば、スマホなんて必要ないように思います。

大人数の友達で遊んだことがあります。せっかく集まったメンバーなのにそれぞれがスマホばかり見て会話がありません。相手の表情や話し方を感じられる方が、文字で会話をするよりもずっと楽しいはずなのに……。目の前に話し相手がいるのにスマホとだけ向き合う友達を見て、とてもさみしい気持ちになりました。

私の親友は、スマホがあっても会話や目の前の人との繋がりを大切にできる人です。彼女と行ったディズニーランドでは、写真を撮る時以外はスマホを使わず、一日中ずっと話していました。長い待ち時間も、アトラクションと同じくらい楽しくて、何気ない会話が続き、親友との距離はさらに縮まりました。私たちの後ろに並んだ三人組は、無言でそれぞれのスマホを眺めていました。三人とも、なぜかつまらなそうに見えました。

コロナが五類になり、マスクを外す機会が増えました。親友の笑顔から、毎日元気をもらっています。私もいずれはスマホを持つことになるでしょう。そして、親友に笑顔のスタンプを送るかもしれません。でも、想いのこもった表情を交わす関係は変わらないでいたいです。目の前の人を大切にして、目の前の人との時間を心に刻んでいきたいです。スマホがあってもなくても、大切なのは人との繋がりだということを絶対に忘れません。

どんなにきれいな空を見つけても、スマホを持たない私には写真に収めることはできません。でも、写真で見るよりずっときれいな空を肉眼で見て心に収めることができます。空の美しさを隣の人と分かち合うこともできます。

私たちは、便利な物に囲まれています。未来には、もっと便利な物ができるかもしれません。便利な物や最新式の物を使って生きていく私たちだからこそ、物に振り回されないための覚悟が必要なのではないでしょうか。私は、その覚悟の真ん中にあるのは＜人との絆を大切にする心＞だと思います。あなたと私が心を繋ぎ、誰もが心からの笑顔で生きる未来を、私たちの手で作りませんか？

奨励賞

地元を愛する心

文星芸術大学附属中学校　２年
佐　藤　凪　紗

「栃木県　われらの　われらのふるさと」

栃木県が誕生し、今年で一五〇年を迎えました。冒頭の歌は、「栃木県民の歌」の歌詞の一部です。みなさんはこの歌詞についてどう思いましたか。私はこの歌を初めて知った時、歌詞では表しきれないほどの愛を感じました。なぜ、私はそう感じたのでしょうか。

それは幼稚園の頃、私はある本を愛読書にしていたからです。「栃木のゆるキャラ図鑑」です。なぜその本を愛読書にするのかと疑問に思う人もいるかもしれません。実のところ、幼少期の頃は自分でもよく理由が分かっていないまま読んでいました。「様々な地域に、かわいいキャラクターがたくさんいるんだな。」その一心で読んでいました。

しかし、時が経ち小学生になると、自分の住んでいる地域について知識を深める活動が行われました。グループに分かれ、栃木の食や行事などについて調べ、発表する活動です。私はしもつかれや耳うどんなどの郷土料理について調べました。そのことがきっかけで地元の伝統に興味を持ち、絵を描くことが好きだった私は、栃木県にまつわるたくさんの絵を描くようになりました。中でも、日光の湧き水を凍らせて作ったかき氷の絵を描いた時には、周りの背景までこだわって、膨大な時間をかけて取り組みました。これらの活動は非常に新鮮な体験でした。また、栃木の生物や歴史などにまつわる授業などもたくさん受けてきました。

その時、ふと気が付いたのです。私が住んでいる街はこんなにもすてきなものであふれているのだ、と。私は知らず知らずのうちに、栃木の魅力に引かれていたのです。

しかし、社会は私の考えとは違いました。ある日、テレビから聞こえてきたのは、栃木県が魅力度ランキング最下位という話でした。

「日光って栃木県なの？」

その言葉に、私はひどくショックを受けました。私にとって魅力的な栃木県は、県外の人の目に同じようには映っていないということを実感しました。

この魅力はどうすれば伝わるのでしょうか。私は次のように考えます。私のような学生たちが、大学進学などで栃木県を出てスキルを身につけ、再び技術や知識を持った人たちが栃木県に戻って地元を活性化させる。それが大事なのではないだろうか、と。

私の将来の夢は、中学校の養護教諭になることです。怪我の手当てをしたり、気分が悪くなった生徒のサポートをしたり、時には悩んでいる生徒の相談相手になったり、様々な子どもたちに笑顔を与えられる職業だと思っています。私が養護教諭を目指したのは、栃木の伝統の中で培った優しさを持つ先生方に接してきたからです。中でも養護教諭は、子どもの気持ちに寄り添うことが多いため、私も伝統を胸に優しさを身につけ、養護教諭になって子どもたちと接したいと考えています。私は、県外の大学に進学して養護教諭の資格を取り、生まれ育った栃木県に戻ってきて、栃木の素晴らしさを子どもたちに伝えていきたいと思っています。

愛のある美しいふるさとをわれらで守っていく、われらで育んでいく、それこそが「栃木県民の歌」の歌詞に込められた意味なのかもしれません。

私はこの言葉を知って、将来、栃木県を誇れる人になりたいと強く思いました。そして、この主張で地元を大切にしていこうと思う気持ちが少しでも伝わればよいと思います。

「栃木県　われらの　われらのふるさと」

奨励賞

相手を想った思い込み

小山市立大谷中学校　３年
梅　本　颯　吾

皆さんにとって、この世で一番大切な存在とは何ですか。いつだって冗談を言い合える親友でしょうか。愛情をもって自分を叱ってくれた親でしょうか。私にとって一番大切な存在は両親です。私の家は、私、四つ年上の兄、五つ年上の姉、そして母の四人家族です。父は、私がまだ物心がつく前、病に倒れ他界しました。このことを聞いて、何を思ったでしょうか。かわいそう。元気づけてあげたい。大丈夫なのかな。今まで辛かったね。そんな言葉の数々が聞こえてきます。その通りです。辛いです。悲しいです。苦しいです。一緒にサッカーをしてみたかったです。苦しくて苦しくて、母に泣きついたこともありました。

「ねえ、何で俺にはお父さんがいないの」

「ねえ、何で俺が大人になる前にお父さんは死んじゃったの」「ねえ、何で俺はお父さんを覚えていないの」悲しみの感情に任せたこんな質問。むせび泣きながら、必死に母に伝えました。母は、真剣に聞いてくれました。「そうだよね。辛かったよね。苦しかったよね。」当時小学生だった私に、優しく声を掛けてくれました。救われました。

私が家族について考えたのは、中学二年生の冬、立志式のことでした。一人一人に親からの手紙が届き、それを読む。母の几帳面すぎる字で書かれた数枚の手紙。一文字一文字噛み締めるように読み進めました。そのとき、ふと母の口癖を思い出していました。「それお父さんにそっくり。」私や兄に対して、こんな言葉を掛けてきます。その動き。その表情。その話し方。私は、母の口癖が大好きでした。何一つ思い出も残っていない父を、とても身近に、感じられたからです。きっと母は、私や兄から亡き父の面影を感じたのでしょう。母は、「今の表情すっごいお父さんに似てなかった？」と笑いながら姉に問いかけます。そんな母の問いかけに、「うわ、確かに似てる。」私以外の家族は、同じように笑っていました。父の話をする家族は、本当に楽しそうでした。ただただ羨ましい。私も父との思い出が欲しかった。もう少し早く生まれていれば、兄や姉のように父との思い出で笑うことができたのではないか。私は父との思い出がないから辛い。何も覚えていないから可愛そう。父が亡くなったことによる悲しみは、自分が一番大きいと、本気で思っていました。しかし、それは大きな間違いでした。父と過ごした時間が長いからこそ、父との別れが辛いのです。苦しいのです。誰よりも辛かったはずの母が、たった一人で私たち三人の兄弟を育ててくれました。感謝しかありません。父の死から十年以上が経ち、ようやくそのことに気がつきました。手紙の最後には「生まれてきてくれてありがとう」の文字。目には涙が浮んできました。

中学三年生になった私は、父の死を理解することができます。もちろん悲しいです。苦しいです。泣き叫びたくなるときもあります。けれど、今の私は幸せです。父親がいない。母親がいない。それが直接その人の不幸であるとは言い切れません。この人は、小さい頃に親を亡くしている。すなわち、この人は可愛そうな人なのだと、憐れむ必要はないのです。過剰に心配をして、慈悲をかけてしまっては、余計にその人の心の傷をえぐることになりかねません。大切な人を亡くしている人も、そうでない人も同じ人間です。誰とでも同じように接することこそが、互いの心を豊かにする一番の近道なのです。

もし大切な人を亡くして落ち込んでいる人がいたら、伝えたいことがあります。今は苦しくても、いつかあなたは幸せになれます。だから今は泣いたって良いのです。誰かに助けを求めても良いのです。あなたの気持ちを理解してくれる人は、きっとあなたの近くにいるはずです。あなたの幸せは、あなたの大切な人にとって何よりの幸せです。自分は幸せだと心から思える、そんな日々をこれからも大切にしていきましょう。

奨励賞

ＩとＬＯＶＥとＹＯＵ

下野市立国分寺中学校　３年
篠　原　花　音

「あなた、元気、ですか？」
初めて友達に伝わったその手話は、私にとって閉ざされてしまった状況からの抜け道のような光となりました。皆さんは、手話と聞くと何を思いますか。聴覚障がいをもった人の言語？言葉よりもっと不自由なもの？手話は聴覚障がい者が殻に閉じこもるためのものではありません。みんなに平等であり、心と心でつながり合えるものなのです。だからこそ私は声を大にして言います。
「世界共通の手話、Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵを広めたい！」

私が手話を始めたのは、小学校六年生の春、コロナ禍の真っただ中でした。それは、学校に行っても友達と会話を交わす事さえ制限された、息のつまるような毎日でした。そんな時、私は声を出さずに通じ合える手話と出会い、どんなに大きな壁があっても心が通い合える事に衝撃を受けました。私は手話に心を奪われ、手話サークルへ通い始めました。そこで、「ろう者」と「聴者」という言葉を初めて知りました。この言葉は、耳が聞こえるか聞こえないか、ただそれだけの違いを示す言葉です。一方で、「健聴」という言葉があることも教えてもらいました。この言葉は私達、聴者の立場の言葉であって、ろう者の人達からみると、自分たちは健康でないと言われているように感じて不快に思うそうです。

そうして手話を学ぶうちに、世界共通だというＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵの手話に出会いました。親指と人差し指と小指を立て、中指と薬指を折り曲げるというものです。私は手話には、言葉より心を通わせられるパワーがあると確信しています。言葉では、少し恥ずかしくなってしまうＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵの言葉は、もし伝えられなくなってしまった時にとても後悔する言葉でもあります。また、世界共通なのだから伝えられる時に、ストレートに伝えるべきなのではと考えるようになりました。

そして、Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵの手話が世界共通なのはなぜだろう。ふとしたとき、疑問に思いました。手話にも種類があり、日本語対応手話や日本手話など世界では通じず、その国の中でしか話すことができません。しかし、Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵが国境を超えられるのはその一言が、世界でも一番美しい言葉だからだと思います。だから、大切な人に伝えられる愛の最上級として、伝わらなければならない手話なのです。

では、なぜ私はＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵを手話で伝えてほしいのか。それは、もっと素直に大切な人へ愛を伝えてほしいからです。外国では、オープンに愛を伝える文化がありますが、日本では余り伝えられません。それは恥ずかしいし、勇気がいるからかもしれません。しかし、そんな時、手話ではストレートに愛を伝える事ができます。だから、手話は決してろう者だけのものではなく、皆さんが色々な場面で使えるものなのです。ぜひ、手話に興味をもってほしいのです。普段あまり、伝える機会のないＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵは、なかなか言葉にできないものですが、手話を通して、大切な人と心を通わせてほしいと思います。

私は、今年の小山市の「二十歳を祝う会」で、手話通訳のボランティアを初めて体験しました。その時、自分がろう者と聴者の架け橋となって、自分を通して会場が一つになった感動を味わいました。海外では、コンサートなどで、音楽がろう者の方にもわかるように手話通訳者が立ちます。日本では、まだ、式典や講演会など、かしこまった場面で必要とされることが多く、コンサートや野外ライブなどで手話をすることはありません。私は、ろう者と聴者の垣根をつなぎ、ろう者の方の世界を広げたいのです。そして、世代や性別、障がいや国を超えてみんな一つになり、同じ時間、空間を過ごしたい。そんな合い言葉…

さあみんなで、「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ！」

講　　評

審査委員長　宇都宮市立国本中学校
校長　髙橋　重年

審査委員を代表致しまして、講評を申し上げます。

今年度の大会は昨年度と異なり、地区審査から聴衆の皆さんの前で発表することがかない、大変うれしく思っています。本日も、普段の学校生活とは大きく異なる環境・雰囲気の中、大いに緊張したと思いますが、すべての発表者が自分の思いを伝えようとする熱意が伝わってきました。16名の発表者の皆さんの発表態度や表現力は、地区代表にふさわしいものでしたので、順位をつけるにあたって、審査員一同大いに悩むこととなりました。最終的には入賞者を決定しましたが、その差はほんのわずかなものです。

皆さんの立派な発表の中、最優秀賞の星野みおりさんは、「生理」の話題をタブー視する風潮に疑問を持ち、「生理の貧困問題」を知って、解消に向けて自ら行動を起こした体験を発表し、たくさんの共感を得ました。優秀賞の戸村美月さんは、曾祖父母の戦争体験を伝え聞くことで、知識として知っていた戦争が身近な人の現実であったことに衝撃を受け、戦争の無い社会を目指し、情報発信していくことを決意しました。同じく優秀賞の河俣美羽さんは、自転車のヘルメット着用が努力義務化されたことを踏まえ、自らの体験やお父様の体験を基に安全意識を高めることを訴えました。同じく優秀賞の板垣結衣さんは、地域で受け継がれてきた祭りに「作る側」として参加した体験から、地域の人の思いやつながりを感じ、伝統や文化を残していくことの意義を訴えました。

このほかの皆さんも、それぞれが大変素晴らしい発表であり、中学生らしいみずみずしい感性で発見した課題意識を基によく考えられており、私たちに驚きをもたらし、感動を与えてくれました。ありがとうございました。

さて近年、新型コロナウイルスの流行や、地球温暖化に伴う気候変動や異常気象、台風や地震といった災害など、予測が困難な事柄が次々と起こっています。将来の予測が困難な、複雑で変化の激しい社会においては、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われています。そのためには、目の前の事柄から解決すべき課題を見いだし、主体的に考え、様々な立場の人々が協働的に議論し、納得できる答えを生み出していくことが重要です。そういう意味では、まさに今日、ここで皆さんが発表されたように、中学生の鋭い視点でたくさんの課題・矛盾が見いだされていることに頼もしさを感じます。今後も自分のよさや可能性を認め、周囲の人々を価値のある存在として尊重し、様々な人々と協働しながら社会の変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いていくこと、また、栃木県誕生150周年である今年の大会を機に、皆さん一人ひとりが活力と希望に満ちたとちぎの豊かな未来づくりへ向かう決意を新たにしてくれることを期待しています。

最後になりますが、本大会開催に尽力くださった関係者の皆様、生徒を温かく応援してくださった御家族の皆様、そして地区予選も含めて、お忙しい中、生徒へきめ細かに御指導くださいました各学校の先生方に感謝申し上げまして、講評と致します。

県 大 会 の 概 要

●目　　的　県内の中学生が日常生活の中で感じていることや考えていることを発表することにより、若者としての誇りと自主性を育てるとともに、広く社会に訴えることにより、同世代の少年の意識の啓発及び青少年の健全育成に対する大人の理解と関心を深めることを目的とする。

●発表内容　発表内容は、概ね次の各号のいずれかに該当し、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークな発想と飾り気のない言葉でまとめたものとする。

⑴　社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
⑵　家庭、学校生活、社会（地域活動）又は身の回りや友だちとの関わりなど。
⑶　テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会のさまざまな出来事に対する意見や感想、提言など。

●実　施　日　令和５年９月16日（土）

●会　　場　栃木県総合文化センター　サブホール

●主　　催　栃木県・栃木県教育委員会・栃木県青少年育成県民会議（(公財)とちぎ未来づくり財団）独立行政法人国立青少年教育振興機構

●共　　催　栃木県更生保護女性連盟

●後　　援　栃木県中学校長会・栃木県ＰＴＡ連合会・(一社)栃木県子ども会連合会・ＮＨＫ宇都宮放送局・(株)下野新聞社・(株)栃木放送・(株)エフエム栃木・(株)とちぎテレビ

●発　表　者　発表者は、８つの地区で下記の表により代表を選出する。

前年度の各地区応募校数	各地区代表者
15 校以下	１名
16～25 校	２名
26 校以上	３名

●審査委員　審査委員は、次の関係行政機関及び団体等から推薦のあった９名に委嘱する。

・栃木県市町村教育委員会連合会　　・栃木県中学校長会
・栃木県私立中学高等学校連合会　　・(株)下野新聞社
・(株)とちぎテレビ　　・栃木県生活文化スポーツ部県民協働推進課
・栃木県教育委員会事務局義務教育課　　・栃木県教育委員会事務局生涯学習課
・栃木県青少年育成県民会議（(公財)とちぎ未来づくり財団）

●表　彰　等　⑴　最優秀賞（栃木県知事賞）　１名（全国大会に推薦）
⑵　優 秀 賞（栃木県教育委員会教育長賞）　３名
⑶　奨 励 賞（栃木県青少年育成県民会議理事長賞）12名

●**審 査 基 準**　1　採点について

次の２分野について採点する。

⑴　論旨・内容　　⑵　論調・表現

2　採点上の観点、留意点

⑴　論旨・内容（事前審査）

ア　中学生らしい鋭い感性で、新鮮な主張であるか。

イ　新しい情報や視点があるか。

ウ　個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。

エ　提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。

オ　論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

⑵　論調・表現（当日審査）

ア　話しぶりに熱意と迫力があるか。

イ　聴衆に共感と感銘を与えているか。

ウ　説得力のある話し方であるか。

エ　落ち着いて、話していたか。

3　発表時間の過不足による減点

持ち時間５分に対して１分以上の過不足があった場合は、「論調・表現」から減点する。

（補足）

・事前の作文による審査を「論旨・内容」の審査とし､当日の審査は、原則として「論調・表現」とする。

・入賞者は審査委員会の協議により決定する。

第46回少年の主張発表県大会審査委員（敬称略）

栃木県市町村教育委員会連合会市教育長部会副会長(那須塩原市教育委員会教育長)	月井　祐二
栃木県中学校長会代表（宇都宮市立国本中学校長）	髙橋　重年
栃木県私立中学高等学校連合会理事（白鷗大学足利中学校長）	髙久　哲史
(株)下野新聞社報道センター長兼政経部長	中野　　勲
(株)とちぎテレビ専務取締役兼放送本部長	坂本　裕一
栃木県生活文化スポーツ部次長兼県民協働推進課長	篠崎　岳彦
栃木県教育委員会事務局義務教育課指導主事	高橋　功昌
栃木県教育委員会事務局生涯学習課主幹	吉田　正道
(公財)とちぎ未来づくり財団常務理事兼事務局長	野中　正知

第46回栃木県少年の主張発表大会　実施状況

○地区大会：県内を青少年育成連絡協議会ごとに８地区に分け、地区内に所在する各中学校が校内発表会等を経て選出した学校代表者（各校１名）により実施した。

地　区	日　時	会　　場	応募者	発表者	学　年　内　訳		
					１年	２年	３年
河　宇	８月24日㈭ 10：00～	パルティとちぎ男女共同参画センター	1,991	31	1	1	29
上都賀	９月４日㈪ 12：00～	鹿沼市 菊沢コミュニティーセンター	2,834	24	1	1	22
芳　賀	８月24日㈭ 13：00～	真岡市 市民会館	1,110	16	0	0	16
下都賀	８月25日㈮ 12：10～	下野市 グリムの館	3,500	33	0	0	33
那　須	９月７日㈭ 11：50～	那須塩原市 三島ホール	864	21	0	1	20
安　足	９月７日㈭ 12：30～	あしかがフラワーパークプラザ	1,162	22	0	0	22
塩　谷	８月31日㈭ 13：50～	栃木県庁 塩谷庁舎	673	8	0	0	8
南那須	９月４日㈪ 14：00～	那須烏山市 烏山公民館	189	4	0	0	4
合　　計			12,323	159	2	3	154

○県大会：各地区大会において選出された地区代表者により実施した。

日　時	会　場	発表者	入場者	学　年　内　訳		
				１年	２年	３年
９月16日㈯ 13：00～	栃木県総合文化センターサブホール	16	168	0	1	15

これまでの県大会

回数	開催日	会　　場	発表者数	地区大会	
				参加校数	応募者数
第１回	昭和53年11月28日	宇都宮市立旭中学校	16		
第２回	昭和54年10月4日	宇都宮市立陽北中学校	16	158	
第３回	昭和55年7月29日	栃木会館　小ホール	16		
第４回	昭和56年9月22日	宇都宮市立旭中学校	16	164	
第５回	昭和57年10月1日	宇都宮市立旭中学校	16	169	
第６回	昭和58年10月4日	宇都宮市立陽西中学校	16	168	
第７回	昭和59年10月4日	宇都宮市立陽北中学校	16	171	
第８回	昭和60年10月3日	宇都宮市立陽西中学校	16	171	
第９回	昭和61年9月30日	宇都宮市立陽北中学校	16	173	
第10回	昭和62年9月29日	宇都宮市立陽西中学校	15	176	
第11回	昭和63年9月29日	宇都宮市立旭中学校	16	175	
第12回	平成1年9月27日	宇都宮市立陽北中学校	16	179	
第13回	平成2年9月26日	宇都宮市立陽西中学校	16	179	
第14回	平成3年9月26日	宇都宮市立旭中学校	16	181	
第15回	平成4年9月25日	宇都宮市立陽西中学校	16	182	
第16回	平成5年9月21日	宇都宮市立陽北中学校	16	186	
第17回	平成6年9月27日	宇都宮市立旭中学校	16	185	
第18回	平成7年9月26日	宇都宮市立陽西中学校	16		
第19回	平成8年10月1日	宇都宮市立陽北中学校	16	183	
第20回	平成9年10月30日	宇都宮市立旭中学校	16	185	
第21回	平成10年9月25日	宇都宮市立陽西中学校	16	183	
第22回	平成11年9月28日	宇都宮市立陽北中学校	16	182	
第23回	平成12年10月3日	宇都宮市立旭中学校	16	183	
第24回	平成13年10月2日	栃木県教育会館　大ホール	16	183	
第25回	平成14年9月28日	とちぎ健康の森　講堂	16	182	
第26回	平成15年9月20日	とちぎ青少年センター　多目的ホール	16	179	32,356
第27回	平成16年9月18日	とちぎ青少年センター　多目的ホール	16	178	24,978
第28回	平成17年9月17日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	16	173	26,872
第29回	平成18年9月16日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	18	174	24,788
第30回	平成19年9月22日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	17	172	21,497
第31回	平成20年9月20日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	18	172	21,160
第32回	平成21年9月18日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	18	173	22,013
第33回	平成22年9月18日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	18	166	19,909
第34回	平成23年9月17日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	17	169	20,961
第35回	平成24年9月29日	とちぎ男女共同参画センター　パルティホール	17	167	19,730
第36回	平成25年9月21日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	168	17,911
第37回	平成26年9月27日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	170	19,556
第38回	平成27年9月19日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	170	19,356
第39回	平成28年9月24日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	170	19,235
第40回	平成29年9月23日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	167	18,966
第41回	平成30年9月22日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	165	16,705
第42回	令和元年9月21日	宇都宮市文化会館　小ホール	16	165	15,549
第43回	令和２年9月19日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	161	12,140
第44回	令和３年9月18日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	162	13,542
第45回	令和４年9月17日	栃木県総合文化センター　サブホール	16	161	12,337

県大会歴代最優秀賞

回数	中学校	学年	氏　名	全国大会の記録
1	田沼町立西中学校	3年	山本　美奈子	
2	塩谷町立大宮中学校	3年	小堀　芳広	第1回全国大会　総理府総務庁長官賞受賞
3	宇都宮市立旭中学校	3年	田村　宏治	
4	栃木県立盲学校中等部	1年	潮田　祐子	
5	佐野市立城東中学校	3年	松本　由紀子	第4回全国大会　内閣総理大臣賞受賞
6	宇都宮市立星が丘中学校	3年	福田　寿美江	第5回全国大会　総理府総務庁長官賞受賞
7	真岡市立真岡中学校	3年	中村　博	
8	足利市立第二中学校	3年	鈴木　博康	
9	佐野市立北中学校	3年	堤　裕美子	
10	烏山町立境中学校	3年	小室　淳子	
11	黒磯市立厚崎中学校	3年	市川　真紀	
12	氏家町立氏家中学校	3年	小野　和美	
13	茂木町立須藤中学校	3年	生井　めぐみ	
14	今市市立今市中学校	3年	小林　知子	
15	足利学園中学校	3年	永島　聖子	
16	矢板市立片岡中学校	3年	小林　俊雅	
17	作新学院中等部	3年	高内　めぐみ	第16回全国大会　総務庁長官賞受賞
18	矢板市立矢板中学校	3年	大串　美雪	
19	氏家町立氏家中学校	3年	平石　友紀	
20	南河内町立第二中学校	3年	金清　舞子	
21	黒磯市立高林中学校	3年	飯田　まりさ	
22	西那須野町立西那須野中学校	3年	松林　朝子	第21回全国大会　内閣総理大臣賞受賞
23	真岡市立中村中学校	3年	深野　志おり	
24	宇都宮市立星が丘中学校	3年	趙　韓知	
25	栃木市立東陽中学校	3年	川野　裕佳	
26	今市市立東原中学校	3年	斎藤　静香	
27	真岡市立真岡中学校	3年	菱沼　優希	第26回全国大会　審査委員会特別賞受賞
28	馬頭町立馬頭東中学校	3年	佐藤　雅俊	
29	日光市立三依中学校	2年	本澤　理沙	第28回全国大会　青少年育成国民会議会長奨励賞受賞
30	那珂川町立馬頭中学校	3年	小堀　美香	
31	佐野市立西中学校	3年	上岡　あかり	
32	上三川町立明治中学校	3年	菅又　拓実	
33	茂木町立中川中学校	3年	石河　智浩	
34	那須町立那須中学校	3年	高久　瑠光	第33回全国大会　奨励賞受賞
35	芳賀町立芳賀中学校	3年	塘内　エリカ	
36	那須烏山市立烏山中学校	3年	須山　優菜	
37	栃木市立栃木西中学校	3年	カリニョ カーロ マリオン	第36回全国大会　奨励賞受賞
38	さくら市立喜連川中学校	3年	石塚　千夏	
39	さくら市立喜連川中学校	3年	髙瀬　樹	第38回全国大会　奨励賞受賞
40	鹿沼市立西中学校	3年	上吉原　由佳	
41	矢板市立泉中学校	3年	神立　千星	
42	下野市立南河内第二中学校	3年	星　優莉香	
43	大田原市立金田北中学校	3年	荒井　千恵理	第42回全国大会 文部科学大臣賞
44	鹿沼市立東中学校	3年	石田　真愛	
45	大田原市立親園中学校	3年	阿久津　結花	第44回全国大会　国立青少年教育振興機構理事長賞

〔参　考〕第45回少年の主張全国大会　～わたしの主張２０２３～
令和５年11月12日（日）13：00～　国立オリンピック記念青少年総合センター

全国大会内閣総理大臣賞

私が歩む夢への道

鳥取県
米子市立東山中学校　3年
矢　曳　未　来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、６年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には２つ上の姉がいる。私は今、中学校３年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れたくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がるとき、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの３年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分はできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

済生会宇都宮病院看護専門学校

http://www.saimiya-kango.ac.jp/

（栃木県済生会）　宇都宮病院　看護専門学校　訪問看護ステーションほっと　宇都宮乳児院　高齢者ケアセンター

あなたの大学進学と海外留学を応援します。

創立以来これまでの28年間の採用実績数は
大学奨学生2,767名、海外留学支援奨学生192名です。

公益財団法人飯塚毅育英会

■大学奨学生

●**奨学金の額（給付型のため返還不要）**
月額5万5千円、給付期間は4年以内

●**募集人数**
220名（外国人留学生は別枠5名）

●**募集期間**
令和5年12月1日（金）～12月15日（金）

＊募集期間は従来より1か月半ほど早くなっておりますので
ご注意願います。応募資格など詳細はHPをご覧ください。

■海外留学支援奨学生

●**奨学金の額（給付型のため返還不要）**
年額60万円、80万円、100万円の三種

●**募集人数**
15名

●**募集期間**
令和5年6月26日（月）～7月7日（金）

＊是非、卒業生の皆様にお知らせください。
応募資格など詳細はHPをご覧ください。

［役員等（順不同）　令和5年6月6日現在］

■理事長／飯塚真玄
■評議員／船田　元、佐藤　信、岸本卓也、池田　宰、古澤利通、飯塚真規、飛鷹　聡
■理　事／上岡利夫、宇田貞夫、中村　仁、瀧田順子、萩原伸二、刑部　節、大塚美代司、永井伸一
■監　事／江連　隆、大森昌浩

公益財団法人飯塚毅育英会
〒320-8644　宇都宮市鶴田町1758番地（株）TKC内　　TEL：028-649-2121　　FAX：028-648-0700
E-mail：itsf@tkc.co.jp　　URL：https://www.iizuka-takeshi-ikuei.or.jp/

応援します
あなたのストーリー
あなたのミ・ラ・イ

あしぎん公式
Instagram
X
やってます!

足利銀行

国際標準規格 ISO27001・9001・14001 認証取得

-事業内容-
- ビル総合管理、総合メンテナンス
- 一般・産業廃棄物収集運搬業(登録)
- 警備業(登録)
- 建物・設備改修工事全般
- 業務請負(学校給食、受付・宿直業務他)
- 保存庫「快蔵くん」製造販売
- 鮮度維持機「いきいきくん」製造販売
- IT 事業(福祉・医療機関業務支援)
- 福祉サービス第三者評価事業
- 指定管理者受託業務(図書館、他)

ビル総合管理
株式会社 大高商事

本　社　〒320-0075 宇都宮市宝木本町1474番地5
TEL 028-665-1911　FAX 028-665-1919
http://www.daikoh.net

支　店　東京・小山・仙台
営業所　福島・群馬・佐野・真岡・日光・県北・県南

for the SMILE

街と人を、もっと笑顔に。

KSK環境整備株式会社

〒321-0973 栃木県宇都宮市岩曽町1333 TEL.028-664-3711㈹ FAX.028-663-4011

https://www.kankyouseibi.co.jp

児童・生徒、教職員様の健康をサポートいたします

○ 児童・生徒様に
- 腎臓検診
- 心臓検診
- 結核検診
- 小児生活習慣病予防健診
- 貧血検査　等

○ 教職員様に
- 一般健康診断
- がん検診
- 特殊健康診断
- メンタルヘルス
- 人間ドック
- 特定保健指導　等

○ 給食や学校をとりまく環境等に
- 食品検査
- 腸内細菌検査
- 放射能検査
- 簡易専用水道検査　等

X(旧Twitter) 始めました！

公益財団法人栃木県保健衛生事業団

〒320-8503 宇都宮市駒生町3337-1 とちぎ健康の森３階 TEL 028-623-8181(代表) https://tochigi-health.or.jp

作新学院大学
作新学院大学女子短期大学部
SAKUSHIN GAKUIN UNIVERSITY
作新学院大学　経営学部（経営学科・ｽﾎﾟｰﾂﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学科）
人間文化学部（発達教育学科・心理ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科）
大学院　経営学研究科 博士(前期・後期)課程・心理学研究科 修士課程
作新学院大学女子短期大学部　幼児教育科

栃木県青少年育成県民会議では

賛助会員を募集しています

心豊かでたくましいとちぎの青少年を育むために是非お力添えをお願いいたします。

賛助会費　団体（1口）　１０，０００円
　　個人（1口）　　３，０００円

加入いただける場合は、下記とちぎ未来づくり財団ホームページから申込書をダウンロードしてお申込みください。

“青少年の健全育成”と“県民文化の振興”を目指します

公益財団法人 とちぎ未来づくり財団

〒320-8530　栃木県宇都宮市本町1番8号（栃木県総合文化センター内）
電話：028-643-1011　FAX：028-650-5284
URL：http://www.tmf.or.jp　E-mail：tmf@tmf.or.jp

HARMONY 1st

誰とでも強調しようと努力する。
HARMONY―和を広げる人材を育てます。

足利大学附属高等学校

男女共学　普通科　工業科　自動車科　情報処理科

～ 穏健質実なる女子教育 ～

「和を以て貴しとなす」

足利短期大学附属高等学校

普通科

足利市本城３－２１２０
０２８４(２１)７３４４

～「夢」へのチャレンジ～ Catch Your Dream

「夢から始まる未来が、ここにある」

宇都宮短期大学附属高等学校
（普通科・生活教養科・情報商業科・調理科・音楽科）
〒320-8585
栃木県宇都宮市睦町１－３５　028-634-4161

宇都宮文星女子高等学校

未来を つくる、いきる ちから。

ICT活用と探究学習を通じて自律力・協働力・創造力を育てます。

秀英特進科・普通科・総合ビジネス科

「作新民。」その“人間力”で、世界を変える、未来をつくる！

作新学院

高等学校（トップ英進・英進部・総合進学部・情報科学部）／中等部／小学部／幼稚園

～なりたい自分になろう！～

「かけがえのない高校生活を思いっきり楽しもう！」

佐野清澄高等学校（普通科、生活デザイン科）

〒327-0843 栃木県佐野市堀米町 840 番地　入試担当 0283-23-0841

PLUS ULTRA

さらに向こうへ

2024年4月、『白鷗足利』が生まれ変わります。

普通科　特別進学コースSクラス / 特別進学コース / 進学コース / 総合進学コース

HPはこちらから

白鷗大学足利高等学校

〒326-0054　栃木県足利市伊勢南町 3-2　0284-41-0890

人生を強くする文星

ONE STEP BEYOND　Pride 2023

文星芸術大学附属高等学校

〒320−0865　栃木県宇都宮市睦町 1−4　TEL 028−636−8585　FAX 028−633−2321　www.bunsei.ed.jp

（注）栃木県私立中学高等学校連合会加盟校につきましては、五十音順に掲載しています。

令和５年度　第46回栃木県少年の主張発表県大会記念文集

発　行　日　令和６年１月15日
編集・発行　栃木県青少年育成県民会議
（公益財団法人とちぎ未来づくり財団 青少年育成課）
〒320-8530 宇都宮市本町1-8 栃木県総合文化センター内
TEL028-643-1005　FAX028-650-5284

後　援　　栃木県中学校長会　栃木県ＰＴＡ連合会　（一社）栃木県子ども会連合会
NHK宇都宮放送局　㈱下野新聞社　㈱栃木放送　㈱エフエム栃木
㈱とちぎテレビ